

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 61 No. 2 2009

主幹 佐野 正之

巻頭言

剽窃ひょうせつと言語訓練

獨協大学教授 ● 安間 一雄

大学で英作文の課題を出すとき、あるいは英語でレポートを書かせるときに必ず直面する問題が学生の剽窃、すなわち他人の論文や記事をそのままあるいはアイデアだけをちゃっかり取ってきて自分の文章に融合させてしまうという不正行為である。インターネットの発達に伴いコピー&ペーストがいとも容易になったことが、剽窃の横行を加速させている。ところが教員は厳しく指導しているつもりでいても、学生側はさほど問題意識が高くない。この背景には、文化の違いがあるとする見方と、言語習得の到達度が原因であるとする見方の2つがある。

Sowden(2005)は、知識は共同体の共有財産であり、権威に対抗せず学習知識を複製し再生産するのがよいとされる儒教の規範が、東アジアから英国に来た留学生の剽窃行為の根源にあると指摘する。また、Bowden(1996)は、アジア圏の学生には、談話の所有権が個人に帰属するという西洋の考え方がまったく理解できていないと述べている。しかし西洋の価値観を受容して表現行為の権利意識を変えることを求めるのは、文化帝国主義と言えるのではないか？ これに対してLiu(2005)は、不十分な言語習得が剽窃行為の主たる原因であるとしてアジアの学生を擁護している。言語習得過程では、テキストや教師を含め他人の表現を“まねる”ことは自然な行為であり、他者に依存しない表現を求めることは無理な要求であるというわけである。

教室での英語の指導に立ち返って考えてみよう。MacGregor(2002)は、剽窃を避けるためには(1)表現のオリジナリティーと(2)出典の明記を指導することが大切だと主張している。しかし中学・高校でこれらを教えているか？ 逆に剽窃を暗黙のうちに指導していないだろうか？ たとえば教科書本文に対する内容理解の設問はほとんど答えがそのまま抜き出せるものである。生徒はパラフレーズすることを求められず、出典も問われずに正解を得てほめられるという経験を積み重ねる。もし英語圏の価値観に歩み寄るならば、「自分の言葉で表現する」ことの意義を教えるようにシラバス・指導理念の改定が必要なのではないか？

読むことの指導の在り方

岡山大学大学院教授 高塚 成信



1. はじめに

小学校での外国語活動とあわせて音声英語に親しんできた児童が、中学校での英語学習において学び、身につけなければならない重要な知識・技能の1つが読むということです。英語の音声と文字との関係は複雑で、知っている音声を文字と結びつけることは容易なことではありません。また、現行の学習指導要領では、聞くこと・話すことに指導の重点が置かれていましたが、新しい学習指導要領では、4技能のバランスに配慮した指導が求められており、読むことの指導はこれまで以上に重要なものとなります。

2. 音声から文字へ

英語のアルファベットは、『英語ノート2』の最初の2課で指導されることになっていますが、残念ながら小学校での指導は圧倒的に音声中心であり、文字は定着していない可能性が高いです。まして音声と文字との関係については意識されていないと思われます。

生徒が音声ですでに知っている単語はかなりありますので、意味を明確にしたうえで、音声と文字を同時に提示し、両者を結びつける活動が必要となります。最初は自分で綴れる必要はありません。知っている音がどのように綴られるのかを認識することが重要です。

その際、フォニックス(phonics)、つまりある音がどのような文字で表されるのかという「音と文字との関係」についての基本的なルールの指導も大切です。これは、新学習指導要領の言語材料の取扱いに、「発音と綴りとを関連付けて指導すること」が追加されていることから明らかです。

3. 文字から音声へ

音声から文字への処理と同様に重要なのは、文字から音声へという逆方向の処理です。外国語と

しての英語において、一連の文字をある英語の単語であると認識できるのは、文字を音声化することをおしてです。音声化と言っても必ずしも声に出す必要はありません。頭の中で音を出しているだけのこともあります。前者が「音読」で、後者が「黙読」です。どちらも文字を音声化して読む活動ですが、中学校では、話すことにつながるためにも、音読はとても重要な活動です。新学習指導要領で強調される「繰り返して指導し定着を図ること」にもつながります。

音読をとおして、読むことの下位技能としての文字の音声化による単語認識のプロセスをある程度自動化することができれば、より高次の構文解析から意味解釈のプロセスに、より注意を向けることができるようになります。そのためには、音読スピードを上げる練習も必要です。なぜなら、早く音読できるということはそれだけ単語の認識が速くなり、複数の単語をチャンクとして保持し、処理できるようになるからです。

また、音読のバリエーションとして、文字を見て語句や文単位で黙読・音読した後、顔を上げてリピートするRead and Look upの活動は、ワーキングメモリーにおける英語保持を促し、言語習得を助けるものであると思われます。

4. 全文訳から目的に沿った読みへ

さて、読むとは一体どういう行為でしょうか。多くの生徒は、「読むこと＝日本語に訳すこと」と思っているのではないのでしょうか。英語を読んで意味を理解するうえで、日本語に訳すことは重要な処理である場合もありますが、常に日本語に訳すことを強調することには問題があります。

第1に、生徒は英語を日本語に置き換えることで安心してしまいますが、内容を理解している保証はないということ、第2に、日本語に訳さないと読んだ気がなくなり、不必要にいつも日本語

に訳し時間を無駄にすること、そして何よりも、日本語に訳して記憶に残るのは英語ではなく日本語だということです。

日本語に訳すことを阻止する1つの方法は、ある程度の分量の文章を、時間制限を設け質問に答えられるだけの目的で読む活動です。全部を訳していたのでは時間が足りません。読む条件と目的を与えることで、それに即した読み方を促すことができます。

細部を気にせず概要を把握すること(skimming)や特定の情報を検索すること(scanning)のような現実の言語使用場面が必要となる読むことの技能を培う活動をもっと取り入れる必要があります。

5. 読むことから話すこと・書くことへ

読む目的との関連で見逃してはならないのは、新学習指導要領において、読むことの言語活動として、「話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること」が加えられたことです。

読んだ後には、読んだことに対して「知らなかったことがわかってよかった」、「書いてあることには反対だ」などと反応するのが通常の言語使用です。したがって、読む際にも、書き手が何を言いたいのかその意向を読み取るとともに、書いてあることを鵜呑みにするのではなく、真偽を含めて批判的(クリティカル)に読む態度を育成することが大切です。

さらに、読んで理解したことやそのことに対する自分の考えなどを、誰かに伝えるために話したり書いたりする活動へとつなげる必要があります。そのためには、まず、本文を何度もよく読み、本文の英語を記憶の中に取り込むことが必要なのは言うまでもありません。

このように、4技能をバランスよく総合的に、また関連付けて統合的に指導することによって、4技能を統合的に活用できる力を育成することの重要性が、新学習指導要領において強調されています。

6. 教師依存から自律的学習へ

新学習指導要領の指導計画の作成と内容の取扱いに、「辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること」とあります。これは、現行の「辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるようにすること」から一歩踏み込んだ指導を要求しているように読めます。

英語学習に辞書は不可欠で、それゆえ学習の初期から辞書に慣れ親しむことはたいへん重要なことです。しかし残念ながら、中学校ではこれまで辞書指導が真剣には行われていません。

国語における付箋紙を用いた辞書引き指導実践の大きな成功(深谷, 2006)は、英語の指導の在り方を考えさせてくれます。きっと、英語の教師は、他教科にも増して、生徒の自ら学ぶ力を過小評価し、過保護にも常に自分が英語という学習対象について知識の源泉でありたいと願いすぎているような気がします。

生徒は自分で辞書を引くことをとおして、制限された教科書を超えて、多くの言語サンプルと出会い、英語について数々の仮説検証のプロセスを経て自律的に英語を学んでいくと思います。

7. おわりに

文字は言語学習を支えるものであると同時に、大きな負担にもなります。音声から文字への接続をうまく行い、言語習得の源泉かつ現実の言語使用場面における重要なスキルである読むことの活動がしっかりと行われることを期待しています。

参考資料

- 深谷圭助(2006)『7歳から「辞書」を引いて頭をきたえる』すばる舎
- 文部科学省(2008a)『小学校学習指導要領』
- 文部科学省(2008b)『小学校学習指導要領解説(外国語活動)』
- 文部科学省(2008c)『英語ノート5年生(試作版)』、『英語ノート6年生(試作版)』
- 文部科学省(2008d)『中学校学習指導要領』
- 文部科学省(2008e)『中学校学習指導要領新旧対照表』
- 文部科学省(2008f)『中学校学習指導要領解説(外国語)』

五感を刺激し、4技能を育成

北海道札幌市立平岡中央中学校教諭 鎌田 洋子



1. はじめに

私が日々の教材研究にあたって大切に思っているテーマは3つある。

- (1) Realな場面設定で言語活動を
- (2) 使って覚える, 覚えながらまた使う
- (3) Up-to-dateを楽しみ, 自分自身もBrush upを

私自身が英会話スクール全盛時代に育ったわけではないので、いかにして非日常的な英語環境の中で、生徒の意欲を喚起し、継続させていけるか、また逆に、自分ならどう教わりたいかと常に考える。結果として、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚のすべてを意識するに至った。

2. 五感を刺激して

(1) 視聴覚機器の活用～LL教室の効用～

授業はLL教室で行う。他教室への騒音を気にせず活動ができ、OHCの活用で、生徒は近くのモニターを確認できるため、Show & Tellが充実する。また、ヘッドセットをつけさせ、LLの機能を使ってペアを作り、擬似的に電話での対話練習をすることもできる。顔の見えない相手とのラインをとおした対話は、音声のみに集中でき、おおいに盛り上がる。

毎時間、生徒は“Welcome Movie”に引き寄せられて移動して来る。行事や季節に合わせた洋画や英語のアニメが多いが、続き見たさに我一番にとやって来るので、チャイム席指導は不要である。異文化理解教材として、旅先で購入したり市立図書館で借用したビデオを使用している。Independence DayではStatue of Libertyを、2年生のProgram 3ではGreat Barrier Reef, Koala Parkを、Program 4ではMother Teresaを扱った。授業時間を有効に使うには、10分間の休み時間も本時題材のレディネスを与える貴重なひとときとなる(使用教科書は開隆堂のSunshine)。

授業は「今月の歌」で始まる。主にCDを流すが、PVや字幕つきカラオケだと生徒はより楽しんで歌う。また、録画したTVアニメを扱うこともある。オープニングの歌を所々で止め、映像に関するQ&Aを行う。オーラルのみのとき、ライティングをさせ

るときなど形態はさまざまだが、生徒の食いつきは良好だ。答えたい欲求からか、質問のリスニング力は抜群である。教科書のQ&Aと同様、迅速かつ正確な英語(主語、動詞、代名詞などを使用)での解答を要求する。(例“What is Maruko doing?”—“She’s cooking ~.”)

また、時事問題にも目を向けさせたいので、旬のニュースを聞き取らせ、穴埋めや感想を書かせている。今年は「ダライラマ来日会見」「洞爺湖サミット」「オバマ氏勝利宣言」などを扱った。映像は難しい話題への不安を和らげ、リスニングを助けて理解を容易にさせる。

(2) 味覚・嗅覚を使って

私はエビ風味の某スナックに目がなく、旅先ではパッケージまで酷似した類似品を必ず購入して帰る。台湾製、中国製、韓国製、アメリカ製と豊富である。どこ製のものかマスキングしたものをひとりひとり試食させた後に、“Which one do you like better?”が生きてくる。グループ活動にすることで対話練習が充実し、オリジナルの日本製を当てたチームには賞品が授与される。この活動は受身形、過去分詞の学習にも発展させることができる。

2年生のProgram 6で欲求を表す不定詞の名詞的用法を扱うが、この導入では数名のランナーを選抜し、BGM「ロッキーのテーマ」が終わるまでひたすら教室を走らせた。“I’m running.” “He’s running with his friends.”などと、目下の状況を英語で言わせる。程よく喉が渴いたと思われる頃、マスキングされた2種類のwaterを前に“I’ll serve two kinds of water. Which water do you want to drink, A or B?”と質問する。未習であるにもかかわらず、不思議と“I want to drink ~ water.”と返ってくる。用意した水は透明の「清涼飲料水」と「水道水」であるが、飲む前に、生徒に目隠しをさせ、“It smells ~. I think it’s ~.”と嗅覚を使った判断を加えさせることもできる。

ドリンク系は現在完了形の導入においても、他の時制と関連させて使える。“Have you ever drunk the new coke?” “He drank the regular one yes-

terday.” “He wants to drink the new one.” “Now he’s drinking, he’s drinking ~.” “Oh, he has just drunk it.”と例を示し、2回目からは生徒が実況中継を行う。最後はワークシートにまとめ、文法の確認をする。

(3) 触覚を使って

触覚を利用した活動例である。1年生Program 2ではBlack boxを手作りし、クラス人数分の「物」を用意した。全員でそれが何であるかをたずね、前に出てきた者はその「物」を触りながら当てる。わからなければ“I’m sorry, I don’t know. What’s this?”



と逆にたずねる。ギャラリーには見えて、自分には見えない。見えない物をわくわくしながら触って

当てるこの1時間で、生徒は人数分の“What’s that?” “Well ... it’s ~.”を繰り返す。“I think ~.”を使う生徒もいた。

2年生Program 8では数種類のボールを用意し、実際にボールを握らせながら“It’s softer than a normal tennis ball.”と言わせた。これはたいへん意味があると思う。何と何を比較し、どちらのボールについての説明なのか、ボールを握りながら英文を確認することができる。

3. Making Short Movies～君こそスターだ！～

比較の導入にはいつも、2コマ程度の時間をかけてこの活動を行う。まず大きさや色の違うミニカーなどを使い、例文を示す。“The yellow car is bigger than the blue one.” “The red car is the biggest of the three.”その後、グループごとにシナリオを考えさせる。説明は以下のみ(この時点では、まだ「比較級」「最上級」という言葉は未習である)。

- (1) 身のまわりの物や人を比べる内容のショート・ストーリーを作ること(「最も～」という表現も使って)
 - (2) 指示された形容詞・副詞を使うこと
 - (3) メンバー全員が英文を話すこと
 - (4) カメラ目線(仮想アイコンタクト)で、聞く(見る)人がわかりやすいように発表(説明)すること
- *割り当てた単語: tall / short / long / old / young / fast / slow

生徒たちはまず、辞書(全員の机に常備)を引くなどしてイメージを固める。早いグループは10分後には練習を始め、同時刻内に隣のLL準備室で撮影開始である。「画用紙が欲しい」「次回ぬいぐるみを持っ

てきたい」、などというこだわり派も出てくる。撮影終了後、ハンドアウトで補足し、教科書の内容理解が終わった後にビデオ上映となる。が、実際はディクテーションと聞き、生徒も気が抜けない。各グループの発表の中で、比較級、最上級を使った文を1つずつ書き出させる。聞き取れない所があっても、映像が与えるヒントで英文を完成させるのがねらいである。

4. 成果と課題

多くを説明せず、「使って覚える」がテーマの活動であったが、自分の英語とジェスチャーを確認するように発表する姿勢を、さらに育てる指導をしていきたいと考える。シナリオの一例を挙げると、カードに各自の誕生日を書いて裏返し、“A is older than B.” “C isn’t older than D.”とヒントを出した後、“Who’s the oldest of all?”とクイズ形式にするなど、生徒の創作力に拍手である。ディクテーションの結果は、自作の英文ということもあり、日頃苦手意識を持った生徒の努力に驚かされる。この手応えを原動力にし、4技能の扱いのバランスや、「活用」をとおして言語知識の定着を図ることを意識し、私自身のアンテナをさらに伸ばしていかなければと思う。

I’m a slower eater than he.



「今、英語を話さなければならぬのだ」という切羽詰まった状況は、自然と英文を前から組み立てることを教える。しどろもどろになりながらも、正確に伝えたいと思う緊張感が、第6番目の感覚を呼び起こし、またそういった直感を作用させる活動こそが、コミュニケーションをスムーズにさせていく最高のトレーニングになるのかもしれない。

Warm-up / worksheet (一部抜粋)

CHANGE!! ~ Barack Obama's Victory Speech ~ November 4, 2008

全く異なる状況でこのように

勝利宣言

The road ahead will be long. Our climb will be steep. We may not get there in () () or even in one term. But America, I have never been more hopeful that we will get there. I promise you, we as a people will get there. Oppose (them) of () ()!

私は自信に満ちた ()、確信を持ってここに立っています。

() ()で私たちの勝利は遠くはなかりませんが、任期中でこの勝利を掴み取らねばなりません。アメリカ人は、私は () ()に決して、決して諦めず、必ずや勝利を掴みます。アメリカ国民と一緒に立て、共に前進するに (勝利)

自分が目指す目標をふまえた授業を

石川県白山市立光野中学校教諭 岡本 有生



1. はじめに

週3時間で英語の力を培うのはたいへん厳しい。「実践的コミュニケーション」の育成を念頭に置き、授業をいかにコミュニケーションにするか、英語の教師は頭を悩ますところである。なかなか英語でコミュニケーションをとれない生徒に対して、できるだけ表現しやすいように語句を用意し、意欲をかき立てるような工夫をする。しかしながら、家庭学習が定着していないと、授業中にオーラルで復習してもなかなか授業が進まない。そこで、ノートやワークのチェックをし、家庭学習をいかに定着させるか、一生懸命取り組んでいる先生も多いのではないだろうか。しかし、そのチェックには膨大な時間がかかる。そして、その苦勞の割には基礎・基本が定着していないのが現状ではないだろうか。

また、“Repeat after me.”と言っても蚊の鳴くような声しか出なかったり、クラス全体に英語で発問し“Raise your hand.”と言っても誰も手を挙げないという状況も頭を悩ますところである。入学してきた1年生の頃はあんなに元氣よく英語を話していたのに、いつの間にか…。そのような雰囲気ですべてだけコミュニケーションな授業をしようと考えても難しい。先生の英語の声だけが(時には日本語の説教の声かもしれないが)むなしく響く結果になることも…。

そこで、こんな状況を打破しようと考え、日々取り組んできたことを紹介したい。

2. コミュニカティブな授業にするために

まず英語の授業をコミュニケーションにするために大切なことは「生徒指導」の要素である。

私は運よく数年前から校務分掌として学年の生徒指導を任されているが、生徒指導は決して強面の先生だけが出来る、またはすべきことではなく、どの先生も授業で生徒指導をしていくべきだと思

う。生徒指導の基本的要素は「生徒指導の3機能」だと思う。すなわち「自己存在感」、「自己決定」、「共感的人間関係」である。

生徒それぞれが「自己存在感」を感じられる授業になると、授業の雰囲気があたたく活気あるものになる。私がまず考えたのは、生徒の発言を評価していくということであった。確かにいつの時代でも、どんなところでも、初めの頃は生徒は積極的に発言するものである。教師というのは勝手なもので、発言してほしいが、発言が活発になると「うるさい」と思うようになってしまう。いかに「うるさい」と思うことがあったとしても、活発な発言にどれだけ助けられているのか考えもせず…。

そんな悩みを抱えていたとき、石川県珠洲市で行われた研究授業のアイデアをいただいた。それは一授業につき、一人二発言した者にステッカーをあげるということであった。一発言したら黒板に名前を書き、二発言したらそれに丸をつける。そうすると、何度も発言したい者は他の者に発言のチャンスを譲り、みんなでステッカーをもらおうとする助け合いの気持ちが出てくる。一人二人の発言を頼りに進める授業はなくなり、また「うるさい」と思うこともなくなった。また、3年生になっても発言してがんばる生徒も増えた。

ただ、そうしていても発言する生徒は固定化していく。どうしても発言できない者の中にはいる。だからといって、コミュニケーションする力がないと言えるだろうか。コミュニケーションには、音声と表記の二面がある。そこで、自学ノートを作り、いかに意欲的に英語の勉強に取り組んでいるかを評価することにした。よって、発言と書く努力の2つのことを〈コミュニケーションへの関心・意欲・態度〉の一部として評価することにした。

これらのことも含め、評価の仕方について生徒

には年度当初に説明している。だから自分のどんなことが評価されているのかわかり、どの部分がんばればよいか「自己決定」することになる。評価されることがわかれば生徒は自ずとがんばろうとする。ただこのように授業を進めていっても、英語が不得意な者は発言もせず、書く努力もしない。そして一部の生徒だけの授業になってしまう。

そんな生徒でも授業の中で「自己存在感」を感じ、英語で取り組めるようにペアワークを常に取り入れ(時にグループワークになる場合もある)、発表についてもできるだけペアで発表させるようにした。すると、お互いに教え合いながら発表する場面が見られ、得意でない者もがんばろうとする場面が増えた。また、毎回の授業に意図的な指名を取り入れることで、挙手しない者たちも緊張感を持って授業に取り組むようになった。

こうして、英語が不得意な者を授業に生かし、ほめて認めることによって「共感的人間関係」を作り、あたたかい雰囲気の授業ができるようになった。

3. コミュニカティブな授業で力をつけるために

コミュニケーションの基礎になる力を培うために、家庭学習を定着させたいと誰しもが考える。しかし、ただチェックすることに全力を注いでも、先生にとっても生徒にとっても機械的な作業となるだけである。結局、単語や重要な文は覚えて、使えなければ意味がない。生徒にとって、目標のない学習をしても基礎的な力は定着しない。つまり、英語の教師として、生徒につけたい英語の力を具体的に考え、その目標に向けて中学校でのシラバスを考えなければならない。私の考える目標は「英語でさまざまな課題について簡単な英語で話し合うことができる」である。簡単な英語でディベートをすることができる力を生徒につけさせることを常に念頭に置いて3年間のシラバスを考えている。

ディベートはたいへん難しい。以前ディベートを試みたが散々な結果だった。初めのテーマについての意見は言うことができるものの、その後相手の意見を聞いて反駁するなんてとてもでき

なかった。生徒は日本語として考えるには考えられたが、英語として話すにはさまざまな力が要求され、授業の中で実施することはかなり難しかった。

そんな悩みを抱えていたときに出会えたのが、「タスク活動」であった。石川県中学校英語研究会で行われたタスク活動についての高島英幸先生の講演に感銘を受けた。

タスク活動は、課題解決型で意味内容の伝達に重点を置いたコミュニケーション活動である。ただしその中には、教師が生徒に身につけさせたい言語材料を暗に組み込んでいる。表現しやすい場面を設定し、条件を考えれば、ディベートのようなコミュニケーション活動も可能であると考えた。実際に授業でやってみると、生徒は初めとまどいを見せるものの、タスク活動として簡単なディベートをすることができた。

しかし、タスク活動は言語材料を導入し、練習した後の定着に使われることが多いようであるが、時間をかなりとられる。また、系統立ててやらないと生徒も混乱するようだ。そこで、それぞれの単元の表現活動の中で、簡単なタスク活動を取り入れることにした。そうすることで、生徒はどんな場面でもその言語材料を使うかを理解でき、定着させることができるように思う。また、各単元の言語材料をしっかりと学習しなければコミュニケーション活動ができないという意識が出てくるように思う。

4. おわりに

コミュニケーションな授業には家庭学習が不可欠である。生徒に家庭学習の大切さをいかに意識させるかが、今後さらに大事になってくるように思う。

参考文献

- 高島英幸(2005)『英語のタスク活動と文法指導』大修館書店
- 高島英幸(2005)『英語のタスク活動とタスク』大修館書店
- 中嶋洋一(1997)『英語のディベート授業』明治図書

小・中をつなぐ自己表現活動

奈良県奈良市立田原小中学校教諭 鳥海 一美



1. はじめに

今回の学習指導要領の改訂による大きな変化として小学校5, 6年次での外国語活動の必修化(週1:年間35時間)と中学校での授業時間数の増加が挙げられる。そこで、授業時間を有効に使い、小学校での音声による英語体験をうまく中学校英語につなげていきたい。そして、「もっと英語で表現したい」という意欲が高まるような表現活動を各段階に応じて取り入れていきたいと考える。

本校は小・中一貫教育特区の田原小中学校となって4年目になる。1年生から9年生まで英会話科があり、9年間を系統立てたカリキュラムを組んでいる。以下に、英語教育における小・中の連携を試みた活動の一環例を紹介する。



2. 小・中連携した自己表現活動

従来の中1とは異なり、これからますます音声による英語を蓄えた生徒たちと出会うことになるだろう。そこで、音声で表現できる英語がどんどん活かせる活動を中学校導入期に仕組んでいくことが必要となる。生徒が「自己表現するための道具」として、彼らの「英語の音声によるひきだし」から自由に出せるような場面設定をする必要がある。

2.1) 実践例: Show & Tellの実施方法

① 5, 6年生の例

身のまわりにある英語から自己表現活動へと発展させていく。子どもたちは「言いたいこと」がいっぱいあるからおもしろい! 次に紹介するのは、どちらも自己表現活動「This is me!」の例である。音声で表現できる英語を子どもたちはたくさん蓄えている。それをうまくTarget Sentenceに活かすように心がけている。

たとえば、「I can eat アプーズ(*apples), but I can't グロウ(*grow) apples.”などの表現もあるからおもしろい! 児童はgrowという英語を今知りたい、今使いたいのである。その適期を大切にしたいと考える。

② 7年生の例

「This is me!」の自己表現活動をさらに広げていく。実物とジェスチャーを使っての“My favorite thing”や、写真を2~3枚スクリーンに映して行う「この人紹介」がある。段階的に7文以上、10文以上と使用する表現数を増やしていくことで難易度を上げていく。原稿を準備して行うのは7年生からであるが、Show & Tellにはすでに慣れているので進めやすい。スパイラルな取り組みが可能となる。

③ 8年生の例

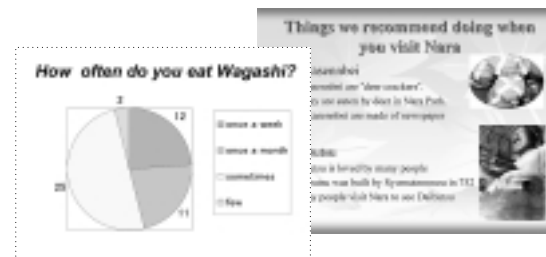
ベアになり、題材に沿ったスキット(商品コマーシャルや体の具合、買い物、空港での会話等)を作って演じる。ここでも、小学校からの蓄えた音声を活用できる。従来とは違い、書けなくても言える英語をかなり蓄えている。そこで辞書を使い、調べながら書くことで、音声からwritingへとつなげている。たとえば、買い物スキットではshopの

種類を各自選んで作らせている。

④ 9年生の例

郷土「なら」について、英語でプレゼンテーションする。前年の職場体験学習や自分たちで調べたことをテーマ別にパワーポイントを使って紹介する。自分たちが取ったアンケートをグラフ化して英語版にする(なら科・情報科との連携)。

発表後、ALT, JTE, 生徒より質問されることに英語で答えられるように各チームで準備する。



*英語による発表形式の手順

・〔5~7年〕発表前にはPre-Presentation活動にベアで取り組む。

Show & Tell に向けて、ベアでPre-Presentationをしよう!		
氏名: _____		
クラス: _____		
聞くよさのポイント	できにかなる	気づいたらベアで聞かすの練習
話し手が、顔や手を使って話している。	☆☆☆	
聞き手が聞き取れないところがある。	☆☆☆	
話し手が自分の話のペースで話している。	☆☆☆	
聞き手が聞き取れないところがある。	☆☆☆	
話し手が自分の話のペースで話している。	☆☆☆	
聞き手が聞き取れないところがある。	☆☆☆	
話し手が自分の話のペースで話している。	☆☆☆	
聞き手が聞き取れないところがある。	☆☆☆	
話し手が自分の話のペースで話している。	☆☆☆	
聞き手が聞き取れないところがある。	☆☆☆	

・発表後Q&A
ALT, JTEからの質問に答える(A:正しい文で答える/B:単語で答える/C:答えられない)。
・相互評価シートにある友だちからのコメントを次回に活かすように伝える。
・評価の観点
〔5, 6年〕理解: 友だちの発表を聞き取れているか。表現: 伝えたいことを表現できたか。
〔7~9年〕理解: 友だちの発表を聞き取り、質問する。表現: Showの工夫(わかりやすい・見やすい), Tellの工夫(声の大きさ, 英語らしさ(英語の発音・抑揚))。
〔共通〕関心・意欲・態度: eye contact, 表情, 絵や写真の提示の仕方。

2.2) 実践例: Interview Testの実施方法

全学年をとおして取り入れているInterview

Testにも、小・中の連携を配慮している。

① 5年生&6年生の例

絵カードや実物またはおもちゃ、地図、チラシ広告等を使って、学期ごとに学習した内容の振り返りを兼ねて行う(→場面設定)。

② 7年生の例

事前に各自テーマを選択し、準備期間を設ける。会話のキャッチボールを目指して取り組む(→テーマ設定)。

③ 8年生の例

グループ・ディスカッション形式や対ALTとのディベート形式も取り入れている。

④ 9年生の例

内線電話を使用したInterview Testを行う。ALTが職員室の内線電話を、生徒が教室の電話を使い「何かに誘う」場面設定でお互いに用件をメモしJTEに提出する(電話による会話は難易度が高いので、最終段階として取り入れている)。



・評価の観点

〔5, 6年〕理解: 正しく聞き取ることができる。
表現: 自分のことに置き換えて表現できる。
〔7~9年〕理解: 相手からのメッセージが聞き取れているか。表現: 自分の伝えたいことを伝えられているか。英語の発音・抑揚などにも気をつけているか。
〔共通〕関心・意欲・態度: eye contact, 表情, 声の大きさ, 会話を続けようとしているか。

3. おわりに

本校では9年間系統立てて英語教育に取り組んでいるが、今回の学習指導要領の改訂により全国的に小・中の「英語の連携」がこれからの焦点になると思われる。



効果的な音読指導

—イントネーションやチャンキングへの意識をととして—

茨城県古河市立三和中学校教諭 沼田 秀人



1. はじめに

私が授業を行っている中で、特に力を入れていることは「音読活動」です。それは、今までの教員生活の中で、「音読ができる生徒は、英語ができる」ということを強く感じてきたからです。

日本語では気持ちの抑揚を自然と表現しているはずなのに、英語の音読になると棒読みになってしまうり、感情が入らずに淡々と読んだりするなど、とたんに変わってしまう生徒が数多く見られます。少しでも教科書を読みやすくするために、いくつかの工夫をした取り組みを進めてきました。

2. ワークシートを使用した授業実践

教科書(HORIZON, 東京書籍)の本文に、「イントネーション」や「チャンキング(区切り)」を入れたワークシートを作成し、授業の音読活動で使用しています。そうすることで、教科書を読むときに、イントネーションや文の区切りを意識でき、棒読み、淡々読みを防ぐことができるからです。

ワークシート作成において、イントネーションに関する項目は、教師用指導書からそのまま使用し、またチャンキング項目に関しては名和(1992)を参考に、生徒の実態を考慮し、教師側で作成しました。また、授業だけでなく、家での練習もこのワークシートを使うように指導しました。

今回、この効果を検証するため、ワークシート使用前(1年生Unit 6)に1回、使用后(Unit 7, 8)に2回の音読テストをそれぞれ実施しました。さらに生徒の意識にどのような変化を与えるかについても、アンケート調査を併せて実施しました。

音読テストの採点については、発音項目(5点)、イントネーション項目(5点)、流暢さ項目(5点)の計15点満点で採点を行いました。また、テストについては、事前にどのパートを読むかは知らせず、教師側が指定したパートの本文を読むことになりました。

3. ワークシート使用の効果

まず、音読テストの合計平均値から見ると、ワークシート使用前(9.41点)、音読テスト1回目(10.69点)、音読テスト2回目(10.69点)であり、若干ではありますが上昇していました。アンケートでは、意識の変化として、72%もの生徒がこれからも、このワークシートを使って音読練習を行いたいと回答していました。意識すべき点がワークシートに書かれていることが、音読のしやすさにつながっているからだと思います。

また、音読の練習量の変化についての質問に対しても、40%の生徒がワークシート使用前よりも使用後の方が、家庭での音読練習量が増えたと回答していました。

今回の試みから、教科書を読みやすくするために「イントネーションとチャンキング」に焦点をあてて音読指導を行うという、ほんの少しの工夫が、生徒の学習意欲を高め、学習効果を高めることにつながるようになりました。

4. おわりに

私は生徒の意欲的な態度を育てるためには、生徒一人ひとりに「自信」を与えることが必要だと思っています。そして、「自信」を持てることが、さらなる「やる気」につながり、生徒の「モチベーション」を上げることにつながると思います。

小学校に通う私の息子が、毎日必ず国語の教科書の音読練習をしています。それを見ながら、自分が小学生の頃を思い出し、考えました。

「日本語の基礎を学ぶのは、教科書の音読だ。英語の基礎を学ぶのも、やっぱり英語の教科書の音読だ。」これからも生徒に「自信」を与えるために「音読活動」を大切にしていこうと、思いを新たにしました。

詳しい内容を知りたい方は下記のアドレスまでご連絡ください。

Hideto.Numata@gmail.com



授業改善で授業力アップ

—授業を開き、授業を変える—

佐賀県武雄市立武雄中学校教頭 中島 裕二



授業をより質の高いものにする営みこそ、教師の使命である。そのために有効なものとして、次の3点を挙げたい。(1)授業公開、(2)生徒による授業評価、(3)研修、である。

上記(1)について述べる。本校英語科では、「自ら授業を開き、授業を変えていく」をスローガンに、武雄市教育委員会の後援を得て、英語教育セミナーを開催し、授業公開の場を設定している。セミナー開催後は、協議や意見交換を踏まえて、提言を発信している。第1回の提言と授業アセスメントポイント55を紹介する。

I. 授業案から学ぶ

- i) 授業者は、単元のレベルで指導・支援の計画をデザインできなければならない。単元の中で、習得・活用・探究のバランス、4観点のバランス、インプット・アウトプットのバランス、帰納法・演繹法のバランス、トップダウンアプローチ・ボトムアップアプローチのバランス等を図る必要がある。長いスパンの見とおしが、1単位時間の授業づくりをよりよいものにする。
- ii) テスト結果の分析と考察を行う際には、誤答分析を詳しく行う。誤答分析が授業改善への示唆を与えてくれる。また、授業のコミュニケーション活動におけるエラーは、言語習得の大切なステップである。

II. 授業実践から学ぶ

- i) 過去の文法指導は、次の点において問題があった。①単文による英文提示、②説明が詳しくすぎ、このことが理解を難しくする要因になっている、③ターゲットとなる文法事項を含んだ英文のインプットの絶対的不足、④用法の理解不足。これらの問題点を解消し、文法能力がコミュニケーション能力の向上につながる指導の在り方を提案する。

- ii) これからの新しい文法指導として、コミュニケーション能力を提案する。その特徴としては、

①新出文型を含む文を、連文またはひとまとまりの談話の中で使用し、意味内容・用法を推測させる、②formはインプットを多くし、formに気づかせる指導を行う、③コミュニケーション方法で展開する、④文法の説明は簡潔・明瞭に行い、コミュニケーションの観点からの説明を加える、⑤文構造は視覚に訴えて示す、などである。

- iii) 英語科においては、授業の展開上のねらいが示されないことが多い。そこで、生徒たちが1時間の授業の見とおしを持てるよう、ワークシートに示すなど工夫をした提示の仕方を考える。
- iv) 日本語に訳せてわかったと思いがちであるが、英語そのものを理解する指導の在り方こそが英語が使えることに通じる。
- v) 基礎的・実践的コミュニケーション能力をつけさせるために、現実の言語使用の場面を十分に考察した言語活動を行わせる。
- vi) Skill GettingとSkill Usingの区別を明確にした言語活動の展開を図る。

III. 授業アセスメントポイント55

授業力を高めるためには、教師が身につけるべき力を明らかにする必要がある。また、授業改善の視点を一人ひとりが明確に持つ必要がある。それで、身につけるべき力、授業改善の視点となる項目を設定した。項目それ自体が目標になるようにした。

従来の授業観察カードと違うのは、授業後の研究会でチームを組んで1項目ずつ検証を行う。たいへんよい項目には◎、よい場合には○をつける。減点法の評価ではなく、加点法の評価を行うことで元気の出る評価とした。授業者が自らの授業のよさに気づくとともに、授業改善への課題を発見することを支援する。授業者とのコミュニケーションをととして、授業者の振り返りと今後の実践への意欲を高める。

1. はじめに

「英作文の問題にはほぼ正解に近い解答をする生徒であっても、自分の思いを英文にすることが苦手なのはどうしてだろう。」ある程度、英語力がついた生徒であっても自己表現となると別物である。これにはいくつかの原因が考えられる。

- ①与えられる問題には多くの場合、主語と動詞が明確に示されている。
- ②与えられた日本語は、辞書に第一義として示されている場合が多く、どの語を使用すればよいか容易に想像できる。

問題集などの場合、解答を示すためには仕方のないことであろうが、英作文の日本語は実際に話される日本語と比べて違和感を覚えることが多い。これでは生徒が自分の思いを表現する訓練としての役割を十分果たしているとは言い難い。

このような思いから、選択授業で取り組んだ例を紹介したい。

2. 阿波弁かるたの活用

それぞれの地方にはその地方独特の言葉(方言)がある。方言はまさに生徒たちの生活に密着した言語であり、生徒たちが日常的に使用している言葉である。

徳島の地方局(四国放送)で、県出身の寺西由佳さんが宝塚造形芸術大学の卒業制作として取り組んだ「阿波弁かるた」が紹介された。生徒たちの生活に密着した言語(阿波弁)をカルタの読み札に取り入れるもので、内容的にも非常にユニークなものである。「これは使える!」と思い、さっそく放送局に問い合わせ、コピーをいただいた。次に「阿波弁かるた」活用の手順を示す。

①課題を知る

読み札は全部で44枚。課題は「ユニーク・ベスト10を英語で表現しよう!」である。これによって生徒はすべての読み札に目をおすことになる。

②言葉の意味を確認する

読み札に使われている阿波弁を抜き出したワークシートを作成し、グループワークで言葉の意味を英語で表現させる。ほとんどが聞いたことのある阿波弁であるが、中には生徒たちが知らない言葉もあり、その意味を理解するヒントとして絵札を与える。生徒たちは、与えられた語を持つニュアンスと英単語の意味を照らし合わせて、最も適切な単語はどれかを吟味することになる。

③自分で選んだ読み札を英語で表現する

日本語の意味を最も適切に表す語を吟味することを覚えた生徒は、読み札の日本語(阿波弁)を正しく表現するために試行錯誤することになる。

④表現した英文を吟味する

生徒個人で英訳した10文を再びグループ内で吟味する。③、④の活動をとおして生徒たちの英文は飛躍的に完成度を増すことになる。次に③、④の活動を経て完成した英文の例を示す。

読み札 「きむらが朝からようけおるでわ」
 ※「きむら」=猿、「ようけ」=たくさん
 (猿が朝早くからたくさん出てきているよ)

③の活動で表現した生徒の英文
 I can see many monkey in the morning.

④の活動を経て完成した生徒の英文
 There have been many monkeys since early this morning.

3. おわりに

英作文の練習といってもよい活動であるにもかかわらず、生徒たちは思いのほか楽しんで活動していた。私たちの生活語をダイレクトに英語で表現する経験がなかったからであろうが、表現しようとすることのニュアンスを大切にしながら表現する楽しさが味わえる活動である。

第2回 小学校英語の特徴



小学校の英語活動は、さまざまな点で中学校とは異なる点があります。小学校英語活動の特徴として、以下の5点を挙げたいと思います。

1. 慣れ親しむ

小学校の学習指導要領の外国語活動(英語活動)には、言語・文化理解、態度面の目標とともに、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」という目標が含まれています。とりわけ「慣れ親しむ」という点が小学校英語活動の特徴を表しています。「慣れ親しむ」という意味は、正確な表現の定着まで求めないということです。中学校英語からすると、どうも手ぬるいような気がするかもしれません。しかし、このことは次の項目を重視する小学校英語にとって大切な点なのです。

2. コミュニケーションの積極性

「慣れ親しむ」ことを目標に掲げた背景には、おそらく小学校段階で「覚える」要素を偏重すると、子どもの動機づけ低下の懸念があるためであると思われます。これは小学校英語の先進国や先進地域の成果報告から垣間見えることでもあります。小学校段階からやる気を失うようでは、英語教育の早期導入の意味がなくなります。小学校英語活動が、子どもたちが外国語の楽しさを実感できる「外国語との出会いの科目」としての性格を持っているからです。

3. 音声を中心とした指導

小学校の英語活動は、基本的に音声中心です。その理由は、音声活動は、文字活動と比べて、求められる正確さがそれほど高くなく、誰もがそれなりにやりとりを楽しむことができるからです。また、小学生は文字がないと不安になる傾向もまだ強くなく、音声を通じてまごど英語表現を覚える力を生かすためでもあります。たとえば小学生は、英語の歌を耳で音をとらえて、そのまま覚える力に長けています。一方、小学校での文字指導は、アルファベットの大文字・小文字の認識や日常の英語文字に気づくなど、ごく初歩的な指導にとどめられており、抑制的です。

4. 数値評価は行わない

小学校英語活動は教科ではないため、英語の定着度を見る数値評価は行いません。体験的、態度的な観察評価が主となります。定着を至上命令とした数値評価がないということは、中学校と大きく異なる、小学校英語活動のきわめて重要な特徴です。これにより、小学校の先生は、学習の到達度ではなく、英語を通じた体験の質や動機づけを高めることに、より力を注ぐことができます。

5. カリキュラム編成

小学校英語活動では、中学校のように文法配列ではなく、トピックや場面を主軸としたカリキュラムが用いられます。言語材料は、特定のトピックや場面に必要な表現が選択可能で、必修の言語材料は指定されていません。

たとえば、中学校で“Do you like ~?” はいつ導入されるでしょうか。中学校の先生ならば、すぐに、1) be動詞の平叙文 “This is my guitar.”, 2) be動詞の疑問文 “Is this your guitar?”, 3) 一般動詞の平叙文 “I like ~.”, 4) 一般動詞の疑問文 “Do you like ~?” という順序であると答えるでしょう。しかし小学校英語活動では、そのような構造的順次性よりも、トピックや体験に関連したコミュニケーションでの必要性が優先されます。ある小学校の英語活動の授業で “Do you like ~?” を教えたケースでは、この疑問文の導入を、「子どもたちが給食時間にALTとお話したい」というニーズが高まったときに行いました。「ALTの先生のことをもっと知りたい」という気持ちの高まりに合わせて、この表現を練習したのです。構造の系統性よりも、子どもの表現意欲のありかや旬に合わせて表現を学ぶという点は、小学校英語活動の重要な特性であり、中学校英語がむしろ学ぶべき点ではないかと思われます。

今回は、このような小学校英語活動の特徴をふまえて、これからの中学校の英語教育がどのように変わってゆくべきなのか、いくつかのヒントを示したいと思います。

ニュージーランド研修と コミュニケーション能力

北海道 立命館慶祥中学・高等学校教諭 吉田 恒



5月のゴールデンウィーク明けに、中学3年生全員が参加するニュージーランド研修がある。35万人が住む南島最大の都市クライストチャーチで、一人ひとりが2週間、それぞれのホームステイ先に滞在しながら現地の学校に通い、生活を送る。この研修はプログラム立ち上げのときから3つの柱を大切にしてきた。1. 自立 2. 異文化理解 3. 英語力向上だ。

1. 自立

生徒は携帯電話を持っていくことを禁じられ、日本の保護者への連絡も基本的にはしてはいけないことになっている。日本の保護者も、自分の子どもや現地の教員への直接の電話は控えることになっており、近年「友だち親子」も多い中、双方にとって大きな自立獲得のチャンスとなる。

2. 異文化理解

ニュージーランドという国は、ヨーロッパ文化をそのまま引き継いだ150年程度の歴史を持つまだまだ若い国である。また、ニュージーランドにはマオリと呼ばれ、クジラを神聖な生き物とあがめる先住民が多く暮らしている。マオリには数々の素晴らしい文化が残されており、ニュージーランドのラグビーナショナルチーム、ALL BLACKSが試合前に行う「ハカ」と呼ばれるダンスもその一つである。このようにまったく異なる文化を持っているにもかかわらず、お互いが尊重し合い、誰もが幸せそうに暮らしているのがニュージーランドという国である。この研修では単に、ヨーロッパ文化、特にイギリスの波及文化を理解するだけでなく、土着の民族文化も肌で学ぶことができる。異文化理解を深める場として、とても有益な国である。

3. 英語力向上

2週間で英語力そのものが飛躍的に向上するという期待はそれほど持てない。しかし、「コミュニケーション能力」という観点からは、生徒は目覚ましい成長を遂げる。生徒は「聞く」「話す」だけではなく、日本から持参した“MYアルバム”と呼ばれる自作の日本の紹介冊子(写真と英文解説付き)をホス

トファミリーに「読み」聞かせ、何度言っても伝わらない場合は、文章を「書き」、4技能をフルに使ってコミュニケーションをとろうとする。生徒たちは毎日、ジャーナルと呼ばれる日記を書く。その中には、伝えたい気持ちを理解してもらえた興奮を多くの生徒が書き残していた。言葉や想いが伝わる喜びと感動を、中学3年の春に彼らは経験する。そしてその経験は本物の学習動機として自分自身の財産となるのだ。

ニュージーランド研修の最終日、ホストファミリーに感謝を込め“SAYONARA PARTY”を生徒主催で行う。今年のあるグループは狂言A POT OF POISONを演じた。これは、中学2年生用の教科用図書にあるリーディング教材である。和尚さんの留守中に、弟子3人が、毒が入っているから決して触れてはいけないと言われていたPOT(壺)の本当の中身を知ってしまうという物語である。狂言であることにこの教材のよさがある。私はこの教材で生徒を4人1チームに分け、劇をさせることにした。生徒は壺を割ってしまったアン(弟子の一人)の感情を読み取り、その動揺を演じ、嘘をつこうとするカンの賢さを表現する。壺の中身は実は毒ではなく、はちみつであるがゆえに、強く叱れない和尚の演技は高いレベルを要求される。

英語劇やスピーチなどでは、長文対策などとは異なり、英文「理解」を超えて、登場人物の心情の解釈にまで達する。そしてこの「解釈」こそが人とのコミュニケーションにおいて大きな力を発揮することとなる。なぜならコミュニケーションという相手のいる空間には「解釈」すべきものが多く存在するからである。研修最終日の夜、日本の文化、狂言を熱演した生徒には割れんばかりの拍手が送られた。

コミュニケーション能力、その定義はさまざまであり、多様であって当然だ。今回彼らが教えてくれたもの、それは人と人との関わり合いの中で、心の解釈をする力がコミュニケーション能力だということである。



『新・言語活動成功事例集』

藤井 昌子 S・アシュトン 本多 綾子 共著

またすごい本が出た。人を魅了する本には2種類ある。大きな理想を示し、人を導くタイプと、エネルギーをもらうため目の前において毎日手に取りたくなるタイプと。本書は後者の代表格だ。

〈本書の魅力〉

1. 実際に成功した活動である

本書で紹介されている活動を私もやってみた。〈What Did You Do?〉、〈The Question Exchange〉〈Out of Order〉、〈A Picture from My Past〉などが生徒には大好評で興奮して活動に取り組んでいた。さまざまな事情で正規の授業中にこうした活動を実施できない場合でも、部活動やLHR(英語のゲーム大会)など用途は無制限だ。ほとんどの活動が15~20分かかるが、普段の授業中に10分以内でさっとできる活動がいくつかあったらさらに重宝するだろう。

2. 「いつ」「どこで」使う活動かすぐわかる

レベル、活動分野、所要時間などが明確に提示され、一覧表を見ながら選ぶことができる。

「過去形を使う」など文法分野の活動も用意されているのがうれしい。単なる「ゲーム」でなく、「inputされた情報をoutputする活動」だからである。こういう活動の手持ちは多ければ多いほど個々の教員にはうれしいものだ。

3. 日・英で解説がある

本書は見開きの左ページが日本語による解説、右ページは英語による解説という体裁をとっている。TTの授業で役立つことはもちろん(特に打ち合わせ時)、1人でやるときでも英語で説明する際は右ページを見れば準備万端。素晴らしい。

4. すぐコピーして使える

実物大のワークシートはコピーしてすぐに使える。さらにCD-ROMが付属しているので、データを加工して使うこともできるのがうれしい。至れり尽くせりである。「教員が楽できる」がミソ。

5. ほっとするコーナー

「活動成功へのアドバイス」「ひとことコーナー」がうれしい。ここだけページをめくって読ん

だだけでもなんとなく明日へのやる気が膨らんでくる。「無理なくいいよ」と教員にも語りかけているようで。

6. 毎日助けられる第2章

中1から高3まですべての学年で必ず役に立つ内容。スラッシュリーディング、多読指導、スピーチ指導など「世間ではよくやっているのだが自分には…」とか「今はちょっと…」と躊躇している方々にも、この章は心のどこかに必ず残り、そのときが来たら、大きな力になってくれるはずだ。私自身は「プログレスノートの活用」がおおいに参考になった。ノートの取り方で悩んでいる生徒もいるし、ノート点検のわずらわしさに閉口している教員も多いはずで、「学習の積み重ね実感のために学習年月日を書かせる」「生徒の要望質問に授業で名前を出さずに答える」「一度に全員のノートを点検する必要はない」など「なるほど」と思われる。ここまでよいとさらに欲を言いたくなる。誰にでもすぐ実践できるものももっと欲しかった。たとえば、効果的な授業ノートの取り方、復習テストの例、定期テストの作り方、などだ。「これならできる」という活動例ほど勇気づけられるものはない。どんなに優れた活動を紹介されても、毎日の負担が大きいものや、時間がかかるものはどうしても「本を読んで終わり」になりがちである。こういった身近なものを取り上げたアドバイスこそが本当の意味で、知らず知らずのうちに役立つだろう。

「言語活動成功事例集」の第3弾である本書は、前作と比較して勢いが衰えているのではないかと思っていた。しかし全然違った。よい意味で予想を裏切られ、非常にさわやかな読後感を覚える。

私の職場の本棚の真ん中にこの本があることは言うまでもない。多読指導に興味がある同僚にも好評だ。自信を持って、お勧めする。

(浦和明の星女子中学・高等学校教諭 赤池 秀代)
[B5判・144頁 ワークシート・データCD-ROM付
定価1,890円(本体1,800円) 発行：開隆堂出版]

生涯プランとしての英語教育

いよいよ2011年度から、小学校英語が始まる。外国語活動として5, 6年生に年間それぞれ35時間の必修としての導入である。中・高の教育現場にはさまざまな反応がある。たかが週1回のそれも英語教育の専門でもない学級担任が教える程度では、たいしたことはないと軽視する向きもある。また、中途半端なことを小学校で教えられると、中学校で教え直さなければならなくなり困るという声も聞こえてくる。

小学校の外国語活動については賛否両論がある。小学生という母語形成期に外国語を始めることの母語への否定的な影響を心配する声もあれば、今や世界の多くの国々で小学校英語が始まっているので、このグローバル化の進む世界で日本の子どもが遅れをとってはならないという危機感を抱く人もいる。

こうした中で、私は小学校英語を後押ししてきた。活動の相談にのったり、教員研修を行ったり、教科書や教材を出版したり、大学で小学校英語の講座を開いたり、小学校英語をサポートする立場をとってきた。

実は、以前まで小学校英語にはまったく興味がなかった。ところが、2000年頃、卒論ゼミの学生が小学校英語をテーマにしたいと言うので、少しだけ目を向け始めたのがきっかけである。以来、小学校の英語活動を参観したり、学級担任の先生が取り組む英語活動を手伝ったりするうちに、次第にはまってしまい、小学校で英語を教えないわけにはいかないと主張するようになった。

小学校英語がなぜそんなに大切なのかと言えば、それによって今までの日本の英語教育にはなかった「生涯プランとしての英語教育」が実現するからである。日本の英語教育では、コミュニケーションの場で使えないという不満が聞かれる。これは、コミュニケーションのために使えるように教えているにもかかわらず、中学1年生という情意・認知面において外国語学習をコミュニケーションのために学ぶには困難な時期に学習を始めることに起因しているのではないか。自己が確立し始めて

いるので容易に他人と交じらない、羞恥心が芽生えて人前で自分が気になる、具体的な活動としてのコミュニケーションよりも抽象的思考が得意になっていて文法が気になる、ただ楽しむよりも知的関心を満たしたいと思うなど、りっぱな大人になるにはプラスだが、ことばを人とのコミュニケーションの媒体として身につけるといふ観点からはかえって困難に遭遇する年齢的時期と言えよう。

最近の小学生は生意気になったとはいえ、小学校の教室に入ったとたんに感じるのは、中学生とはまったく違う、人と自然に交じり合える子どもたちがそこにいるということである。小学生は、他者やコミュニティーへの依存度が高く、それが英語で自然に人とのコミュニケーションを行ううえでおいに生きるのである。小学生のうちに、このことばの具体的使用感覚を身につけ、ことばは人とのやりとりのためにあるということを経験的に学ぶことが、英語使用の基礎になる。

小学校ではコミュニケーションのために使う英語を具体的、体験的に学ぶ。中学校では、そのすでに使っている英語がいかに文法的、体系的にできているかをしっかりと学び、高校ではさらに語彙や語法などを豊かなものにしていくというのが英語教育の生涯プランである。大学生になる頃には、さらに英語に磨きをかけて実際の使用に役立ったり、2つ目の外国語を始める。

こんなばら色の英語教育プランが実現するかどうかは、私たちが小学校の英語活動をどのように育てていくかにかかっている。コップ半分の水は、たった半分でもあり、また半分も入っているとも言える。小学校への英語活動導入は、英語教育関係者や中・高の教員がサポートし、プラス思考で見守り育てるべきではないか。

(津田塾大学教授 田近 裕子)

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、5月、9月、2010年1月、3月にそれぞれ発行の予定ですので、原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を進呈いたします。